

資料館だより

企画・編集 国立ハンセン病資料館

発行 公益財団法人
日本科学技術振興財団

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13

電話 042-396-2909

FAX 042-396-2981

URL <http://www.hansen-dis.jp>

「ハンセン病と人権」 教員対象に夏期セミナー

8月19・20日、教員を対象とした「2015年ハンセン病と人権夏期セミナー」を、資料館の主催により開催しました。開催の目的は、教員の方たちが人権教育を実践するうえでの手がかりを提供することにあります、受講者数は47人でした。

募集要項には、小中学校の教員・養護教員としていましたが、高校や大学の教員、教育委員会、社会福祉協議会などからも夏期セミナーには是非参加させて

頂けないかと強い要望が出されたため、定員に満ちていなかったことから参加を認めました。開催日程は、教育委員会に教員が夏期研修として参加しやすい日程をお聞きし決めました。近隣の教育委員会と校長会で夏期セミナーのお知らせをしましたが、インターネットでハンセン病問題について検索し、資料館のホームページで夏期セミナーのことを知り受講を希望したという参加者の方が多くなりました。

19日は、開校式では館長挨拶と館長ミニ講演、DVD「ハンセン病を

知っていますか」上映、語り部・平沢保治氏による講演「人生に絶望はないーハンセン病とともに70余年ー」、ハンセン病問題の歴史と資料館のあゆみ、「資料館見学」、最後に参加者と「意見交換会」が行われました。長野県の学校の先生から、「学校で人権の授業をしてきたが、実感を伴って、自分自身のものとして語れないことがあつて今回参加した。今回の講座を楽しみにしている。病気になる



語り部 佐川氏の講演

ても人は人、共感していかねばならない、自分が病気になるたらどうなんだろうかということを考えていかなければならないということをお聞きしてハッとさせられた。患者は大変な生活をさせられていた、あのようなことを国はしていたんだということを、第三者的に言っていた自分がいた、これからは、自分自身のものとして語れる授業をしていきたい」と感想が寄せられました。

20日は、「ハンセン病医学」、「多磨全生園内フィールドワーク」、「語り部・佐川修氏による講演「ハンセン病と人権」、最後に佐久間建氏を講師にお招きしてハンセン病問題を通して子どもたちが命と人権の尊さを学び自己の行動につなげることでできる授業実践をするための講演「ハンセン病問題を授業化するには」も行いました。講演終了後の討議で、平沢氏から

「今後、学校、保護者、子どもたちが一緒になってハンセン病問題を通して、命と心の教育を一步ずつ広げて行く取り組みを進めていただきたい」との発言がありました。佐久間氏からは、子どもたちに「今日、人権問題を学習したことを、親にも気持ちを伝え話し合いをしましょう」と宿題を出しているとの補足発言がありました。

閉校式では、参加者にとって夏期セミナーが研修として認められるよう修了証書を発行しました。終了後、参加者からアンケート33通が寄せられ、「毎年開催して頂

きたい」「教員向けだけでなく一般を対象にして開催して頂きたい」「都道府県、市区町村の教育委員会に申し入れて全教師対象にセミナーを開催してもらいたい」「授業実践でもやもやしていたところがクリアになった」「ハンセン病医学が新鮮だった」「自分で本を読み、見学するだけでは得られない実感を得て学習することが出来た」「2日間の流れがとてもよかった。初めての人でも学習内容がとても理解しやすい流れだった」「他人事ではなしに、自分のこととして考える。強く心に響きました。」「語り部のお話が聞けて良かった」「今回、知ったこと、学んだことを人権教育に生かしたい」などの意見、要望が寄せられました。今回のような「ハンセン病と人権」夏期セミナーの開催が、教員をはじめ様々な立場の方に役立つことがよく分かりました。

今後、夏休みだけでなく冬休み・春休み開催、一日講座、土日連続講座、授業実践のための研究会、平沢さんと話そう会+親子で学ぶハンセン病、リタイヤ教員向け講座、出張一日セミナーなどの具体化を課内で検討しています。夏期セミナー終了後、セミナーに参加された横浜市の小学校の先生から6年生100名の講演依頼がありました。また、出張「ハンセン病と人権」夏期セミナー開催の依頼が来ており、現在その具体化も進めています。

学芸部社会啓発課長 儀同政一

精米作業・1924年



秋葉企画展「待労院の歩み」 カトリック系私立療養所の姿

前号で既報のとおり、当館企画展示室において、秋葉企画展「私立ハンセン病療養所待労院の歩み―創立から閉院までの115年―」が始まる。

待労院は、一八九八年に創立されたカトリック系の私立ハンセン病療養所である。日本有数の患者の集住地であった熊本県本妙寺近くに、コール司祭によって設立された中尾丸療養所における「マリアの宣教師フランシスコ修道会」の修道女による療養活動を

その端緒とする。

待労院の名称は、新約聖書の中の「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」という一節に由来する。入所者は修道女や修道志願者と共に働き、信仰を中心とする生活を送っていた。その歴史は国の隔離政策と無関係ではなかったが、国公立の療養所とは異なる面も多く見られる。本展では、待労院資料館やマリアの宣教師フランシスコ修道会資料館などからご提供いただいた写真や実物資料を中心とする展示によって、その歩みをたどっている。

また待労院は、寄る辺ない高齢者や子どもたちの暮らす「聖母ヶ丘」と呼ばれる共同体の一部でもあった。これは国公立のハンセン病療養所にはなかった特徴である。本展では待労院の歴史と共に、「聖母ヶ丘」の歩みについても紹介している。

待労院の建物は昨年解体されたが、現在も「聖母ヶ丘」の各所にその足跡が残されている。また修道院をはじめ老人福祉施設、病院、幼稚園が集まり、地域の福祉と医療を担い続けている。

待労院の歩みについて、多くの方にご覧いただきたい。会期は10月3日(土)から12月26日(土)まで。10月17日・11月14日・12月13日の午後2時より、学芸員による展示解説を予定している。

垣崎厚生労働大臣が来館 納骨堂参拝後資料館見学

9月7日(月)、国立ハンセン病療養所とハンセン病施策の現状を把握する目的で、垣崎恭久厚生労働大臣が多磨全生園と当館を視察した。

まず多磨全生園で朝戸裕園長、佐川修自治会長、森和男全療協会長、藤崎陸安同事務局長らと懇談した後、納骨堂に参拝し、当館には午前10時に到着した。

正面玄関で成田稔館長、藤川淳一日本科学技術振興財団専務理事、植木勉担当理事らが出迎えた。続けて語り部の平沢保治運営委員と黒尾和久芸芸部長が、常設展示を案内した。黒尾部長は、当館が一八九三年に入所者自身の努力によって誕生したことを伝え、その

設立目的と、国賠訴訟後の拡充の理由について説明した。平沢委員は常設展示室全体を、順路に沿って案内した。

また平沢委員から、すでに資料が収蔵しきれない状態のため数年来の課題となっている収蔵庫の増

設実現と、3年後に教科化される予定の道徳教育において、子どもたちへの人権教育の観点からハンセン病が取り上げられるように、協力要請があった。

実は垣崎大臣の視察は、6月に一度予定されていたのだが、国会の都合で急遽延期となっていた。垣崎大臣は「もつと早く来たかった」と述べ、最後に記念撮影などをして、午前10時半頃に当館を後にした。

多磨全生園で恒例の納涼祭 近隣から大勢が集まる

8月6日、多磨全生園入所者自治会主催の納涼祭が開催された。猛烈な暑さが続いており、また当日は夕方から天候が荒れるとの予報もあったが、雨に降られることもなく、終始にぎやかに進行了。

旧全生学園グラウンドでは午後5時から囃子方による呼び出し太鼓が鳴り響き、6時には盆踊りが始まった。踊り連や近隣からの親子連れに加え、

ボランティアとして参加した近隣の中学生も赤い法被を着て踊りの輪に加わった。グラウンドでは子どもたちが走り回り、露店には長い列が続いた。佐川自治会長による



実行委員長挨拶、来賓の方々の挨拶の中でも触れられていたように、地元のお祭りとして根付いた感が強く、入所者の方々も、それぞれの席でその様子を眺めていた。

すっかり日の暮れた8時から、約二、〇〇〇発の花火が打ち上げられた。およそ20分の間、夜空が彩られるたび、詰めかけた人びとから歓声が上がっていた。

奄美で所在市町連絡協議会 15項目の要望事項を決議

全国ハンセン病療養所所在市町連絡協議会の二〇一五年度総会が、7月9日、鹿児島県奄美市で開催された。国立ハンセン病療養所が設置されている自治体（市、町）の首長、議長ら約50人が出席した。総会に先立ち、前日の8日、総会の参加者一行が奄美和光園を訪れ、施設の見学と納骨堂での献花を行った。協議会会長で東京都東村山市長の渡部尚氏は、ハンセン病についての正しい理解の促進とハンセン病問題の解決に全力で取り組むとあいさつを行った。

9日の総会では、国と国会に提出する15項目の要望事項を決議。そのなかで、入所者の多くが重い障害を抱えていることをふまえ、入所者の生活環境の整備及び医療・看護体制の充実を求めることを決議した。また、療養所の今後のあり方にかかわって、入所者と自治会の意向を尊重した療養所の将来構想を策定し実現すること、療養所内に存在する歴史的建造物と歴史的資料を保存し活用するための体制を確立するよう求めることなどを決議した。さらに、各園

で展示機能を備えた施設が次々につくられている状況をふまえ、社会交流会館の活用促進に向けた運営費の予算化と、学芸員等の複数設置も要望事項に盛り込まれた。

総会後には意見交換会が行われ、ハンセン病違憲国家賠償請求訴訟西日本弁護士団の団長を務めた徳田靖之弁護士が、療養所や入所者をとりまく現状や課題を報告した。このなかで徳田弁護士は、療養所の保存について厚労省と統一交渉団との間で一定の合意が得られたことを報告し、協議会に対して入所者がいなくなつた後の療養所永久保存のための協力要請を行った。

所在市町連絡協議会総会の様子



上川法務大臣が来館 資料館の常設展示を見学

7月22日（水）、上川陽子法務大臣が来館した。大臣一行は、全生園施設の視察、納骨堂への献花を経て、資料館に到着。成田館長をはじめとした資料館スタッフが出迎えた。上川大臣は、まず資料館会議室において全療協および入所者自治会と懇談し、次いで館内を見学した。

1階エントランスで黒尾学芸部長が、資料館の設置経緯と理念・目的、そして収蔵資料の特徴等について説明し、2階常設展示室で平沢保治運営委員が合流し、展示室の各所において、療養所での生活実態や生き抜いてきた証として残された展示物の意



解説を聴き微笑む上川大臣

味について解説した。さらに子どもたちに対して未来志向で行ってきた啓発活動の意義を大臣に語りかけた。

すると大臣は、微笑を浮かべ、何度も頷き、質問の言葉もはさみながら委員の話しに耳を傾けた。そして当初予定になかった1階ギャラリーにおける絵本「すみれ」原画展も見学した。



原画展を鑑賞する上川大臣

絵本「すみれ」の原画展

7月17日（金）から7月31日（金）まで、当館ギャラリーにて、絵本

「すみれ」原画展を開催した。絵本「すみれ」は、北條民雄による童話「すみれ」を原作として、山崎克己氏（絵本作家）の絵によって絵本としたもの。今年3月に資料館から発行された（編集はトムズボックス）。絵本の内容は、町に越そうと考えている老人に対し、

庭に咲く花のすみれが、この場で生きる幸せを語るといふもの。

今回の原画展は、絵本各ページの原画を文章とともに展示し、原画を鑑賞しながらストーリーを追えるようになっていた。鑑賞した来館者からは、「山崎氏の絵にあたたかさを感じた」、「自分も身近にある幸せを見つけて大切にしたい」といった感想が寄せられた。



資料館北側の彼岸花

第37回ハンセン病夏期大学講座

医療関係者や学生ら45人が参加

厚生労働省の委託事業として、公益財団法人日本科学技術振興財団と講座実行委員会が主催する「第37回ハンセン病医学夏期大学講座」が、今年も8月3日(月)より7日(金)まで、国立療養所多磨全生園と国立ハンセン病資料館、国立感染症研究所・ハンセン病研究センターを会場に開催された。

受講者は男性15名、女性30名、計45名で、年代別では20代14名、30代12名、40代11名、50代5名、60代2名、70代1名(回復者)である。

所属、職業別では埼玉医科大学、群馬大学医学部、防衛医科大学、常盤大学大学院、聖路加国際大学など11名、西埼玉中央病院、愛知県立総合病院、水戸済生会総合病院、都立青梅看護専門学校、愛知県立看護専門学校、佼成看護専門学校など8名、また松丘、東北、栗生、多磨、駿河、長島、星塚など7園の看護師など医療関係者15名、笹川記念保健協力財団6名、その他大阪府、愛知県、特殊医療法人・俊仁会などの関係者である。

3日9時20分、全生園研修棟において開講式と記念撮影、10時より「ハンセン病と人権」平沢保治

平沢氏の講義を聞く受講生



「ハンセン病概論」石井則久氏の講義が行われた。13時より「ハンセン病の歴史」森修一、「ハンセン病の臨床」四津里英両氏の講義。

各園で資料保存をサポート

今年度から駿河療養所では、文書資料を中心とした資料保存の取り組みに着手している。資料館は同所および入所者自治会からの依頼をうけ、その取り組みに対するサポートを行っている。

今年4月3日に資料館学芸員2名が駿河療養所を訪れ、同所に残されている資料の数量、保存状態等についてのおおまかな調査を行い、その後も資料の整理・保存についての助言を継続的に行っている。

駿河療養所では、自治会も参加する「伝承資料等保存委員会」を立ち上げ、全所レベルで資料保存のための方針を討議・決定する態

15時よりは入所者5名、退所者6名、受講生45名、実行委員4名が4班に分かれ交流会が行われた。入所者、退所者たちの発病から現在までの体験談、思い、願いが語られ質問もあり、ハンセン病への偏見差別解消への理解を深めた。

17時30分よりは参加者、関係者全員が本館2階会議室に集合。和やかな懇親会が持たれた。4日午前は講義が2件あり、午後は資料館で語り部(佐川修)の話を聞き展示を見学。5日、6日は選択で総合コース、看護・福祉コース、国際医療コース、などで講義、実習などを受け、7日午前閉講式が行われ、修了証書が授与された。6日の全生園納涼祭にも参加した。

勢を整えた。すでに、資料の保管場所をふれあいセンター3階とすること、資料の整理は資料館のほうに準じて行うことなどが決められている。今後も資料館は、同委員会と連携しつつ、必要に応じて適切なサポートを行っていく方針である。

松丘保養園では、施設整備計画の一環で、園と市道の境界画定および市道に並行する土塁の削平を伴う「園内道路・擁壁整備工事」の計画を進めている。これには「隔ての土塁から共生の遊歩道へ」という石川自治会長をはじめ入所者と職員の強い願いが込められている。しかし土塁は、開園以来実在

してきた我と彼を隔てる障壁、療養所の隔離の歴史を物語る貴重な遺構である。川西園長より遺構として部分的に土塁を残す具体的な方法について相談をうけた黒尾学芸部長が9月10・11日に現地を踏査、園の協力を得て一部で試掘を行い、土塁に堀が併存しないことを考古学的に確認した。黒尾は堀が無いならば土塁が唯一の障壁遺構になると説明、向後の人権教育の素材として、可能な限り土塁を残すべきだと助言した。園ではこの提言をふまえてあらためて入所者自治会を含めて協議し、土塁の一部保全を前提とした計画を決定した。

多磨全生園敬老会

9月10日多磨全生園の公会堂で敬老会が催された。今年は喜寿1名、米寿8名、長寿(89歳以上)68名。東村山市高齢介護課長、市議会議員、市社会福祉協議会会長、市老人クラブ連合会副会長、藤崎陸安全療協事務局長、花さき保育園長が来賓として招かれた。

朝戸裕園長・佐川修入所者自治会長からの挨拶、市長からのお祝いの言葉(代読)、来賓紹介の後、に喜寿・米寿・長寿の方々へ記念品が贈呈された。佐川会長は最近世間を騒がせているニュースをまじえて挨拶し、5年後の「オリンピックまで頑張りましょう」と挨拶を結んだ。

米寿の入所者は真っ赤なチャン

チャンコを着、帽子をかぶり、首にレイをかけた装い。看護師・介護員は入れ替わり立ち替わり本人達と記念撮影し、あおば保育園児は手作りの花束を手渡し、花さき保育園児は元気一杯なダンスを披露。会場全体が笑顔に包まれた。

米寿を迎えた一人高山勝介さんは、「外にいたらこんなに長生きできなかった。(体力は衰えてきたが)食べたいものを食べ、着たいものを着て、残りの人生をできることをして過ごしたい」と心境を語った。

佐川会長によればこの日の時点の入所者数は二〇五名、平均年齢は八四・五歳だという。高齢化の波は止められないが、それでも残りの人生を前向きに生きようとする入所者の姿が敬老会にはあった。



保育園児によるダンス